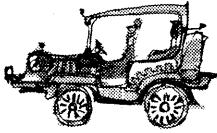


# 幼稚園のある一日

十二月

内 田 和 子



## 一 はじめに

外は木枯らしが吹き、町にはジングルベルがなりはじめたが、幼児たちは、集団生活にもすっかり慣れ、幼児対幼児の関係もスムーズにいき、自分の力を十分發揮して、落着いて、意欲的に活動をつづけている。

このごろでは、教師のちょっとした配慮から、幼児たちは、驚くほどすばらしい能力を表わし、たくましい成長ぶりに教師自身喜んだりとまどったりするのである。一方責任の重大さが身にしみるのである。

教師対幼児ひとりひとりの関係を大切にすることはいうまでもなく、さらに、幼児対幼児の関係を深めながら、お互いが認めあうようにして、自己を十分表わすようにしていきたいと思う。

そこで、十二月の幼児の姿をつぎのように考えてみた。

- ◎ あそびの計画や仕事の分担を自分たちで話し合っけてきめ、より楽しい集団生活ができるようにする。
- ◎ グループの中で自分の能力を十分生かして活動する。
- ◎ 相手の気持や感情が理解できて行動がとれるようにする。
- ◎ 寒さに負けず元氣よく活動する。

つぎに、具体的にある一日について述べてみたい。なお、私のクラスは、一年保育五歳児三十七名である。

## 二 実践例

(1) 月日 十二月八日(火)

(2) 前日の主な活動

① ハイウェイごっこ

教師の準備した木車と板を利用して、スピードの遅い車を作ることができる。できあがった車で幼児たちは、はじめ、廊下でスピード競争をしていたが、友だちと相談して、積木でハイウェイを作り走らす。

② 円形ドッジボール

五月ごろ、教師を中心とした円形ころがしドッジボールをしたことがあったが、このころでは友人関係もうまくいき、機敏性もついてきたので、十人ぐらいのグループで、三メートルぐらいの円形を描き、ころがしてあてるだけでなく、一回バウンドして、あてることもして活動する。

③ 食堂ごっこ

ままごとコーナーを利用して、女児だけで食堂ごっこをしたが、すぐ隣のハイウェイごっこに関心を示し、Y子の発案で、ハイウェイごっこに仲間入りをし、売店をだして活動をする。

(3) 本日の指導のねらい

① ハイウェイごっこ

段ボール箱や大きめの空箱を利用して、ハイウェイから町作りへと発展させ、グループの中で、ひとりひとりの創意やくふうが生かされる中で、友だちとも楽しく相談できるようにさせる。

② ベープサート

ハイウェイごっこは、やはり男児に興味が強いので、女児に合った活動をさせたいと設置する。ハイウェイごっこと同様にひとりひとりが生かされる中で、友だちと楽しく活動できるようにする。また、ふんい気がでるよう効果も考えさせる。

③ 全体の活動

クリスマス行事を、積極的に準備したり、自分たちの役割を理解させる。

(4) 実践

△ハ・三〇▽

登園での出会いとウォーミングアップ

「先生、おはようございます」と、元気な顔が保育室にとびこんでくる。幼児たちは自分の身のまわりを整理して、教師のそばに出席カードを持ってくる。どの顔もにこにこ笑ってうれしそうである。

このころは、幼児たちもぐっと落ち着きを見せ、自分の考えで行動できるようになってきているので、教師の顔をみるだけで、安

心して自分のやりたい活動をしにいく幼児が多い。大半の幼児は、目的をもって登園してきているが、やはり教師の暖かい見守りといっしょに活動することにより安定し、活動が深められていくようである。

このような幼児の状態をながめていて、入園以来九ヶ月の大きな成長に満足を感じるのである。しかし、満足ばかりしてはられない気持もあり、一段と大きく私を残して成長してほしいと願わずにはいられない。

A男は、登園すると、さっそく製作コーナーへ行き、自動車を作りはじめる。木車の大きいのを四個とりだし、かまぼこの板に打ちつけている。隣で同じように自動車を作っているF男が「Aちゃん、なんで大きい車つけたんや」とたずねる。A男「早う走るもん」F男「ぼくのは小さい車やわ。できたら競争しようか」A男「うん」と返事をして、ローリーのあきびんを取り出し、小さいあき箱と組合わせて、生コン車を作っている。きょうもA男たちは、元氣よく活動できるだろうと安心をする。

T子が登園してくる。「先生、おはようございます」とていねいにあいさつをする。きちょう面なT子は、何かにつけて、間違いの少ない感じである。身のまわりの整理をすると黙って本のところへ行き、一冊手にとってストーブのところに椅子をもってきて、読みだす。

しかし、何となく落着かず、保育室の入口が開くとそっちの方へ目をうつしている。N子らを待っているのだなあ」と教師は感じ、見守っていると、やがて、N子が登園してくる。T子は、ちらりとN子を見、やっと落着いたのかじっと本を眺めている。まもなくN子は、着がえをすませ、「Tちゃん」といいながら、椅子をもってきて隣へすわる。同じように本を読みだす。

二人は、黙々と本を読んでいるように見うけられるが、心は十分つながっていると思われる。やがて、メンバー四名がそろろろと、T子「ねえ、何かしてあそぼう」と声をかける。N子「そうな、本をしまおう」と本立ての方へ走って行く。みんなも走りだす。教師がベープサートをしようと思つて用意しておいた竹竿をS子が見つけ「これでバトンマーチおどろう」と、三名に相談をかける。「うん」と三名は返事をして、曲を口ずさみながら、おどりはじめる。このグループも自分たちで活動をはじめたので、ほつとするとともに、ひきつづきよく見守つてあそびを深めてあげようと思う。

元氣者のH男が登園してくる。二、三日園を欠席していたので、何となく気おくれしている感じがする。「Hちゃん三日もお休みだったのね。先生、早くHちゃん来ないかなあと、待っていたのよ」と、声をかけると、恥ずかしそうに「お母さんとしんせきに行ったの」と返事をする。それを聞いていたT男は「そんなら

ずる休みやないか」と聞きなおす。H男は、だまって下をむく。

T男のなにげない質問が、H男にこたえたのではないかと心配し、教師はT男に「だって、Hちゃんの家におばあさんいないでしょう。だからお母さんの用事でも仕方なくHちゃんつけていかなければならないのよ」と説明すると、T男「ふん」と分かったような返事をする。H男も「お母さん、休めていうやもん」といいわけをする。「仕方ないわね」と教師もH男に同情をよせる。

H男は、だまって教師から離れ、友だちのあそびを見にいっただ。ハイウェイに関心をもち、少し離れたところから傍観している。ほかの幼児は、あそびに熱中してH男には気づかないようである。H男は、ちょっとさみしそうな顔をして、製作コーナーに行く。教師「ここにいいものあるわよ。何か作ってみたら」と声をかける。ちょっと周囲をみて、また離れ、つづいて、ブロックコーナーへ、またドッジボールへと、次から次へと見て歩いていく。いつもなら何でも一番にとびこんでくるH男が、三日間の欠席で、他の幼児ががちりとグループを作って活動しているのを見て、入りにくいのである。なるべく家庭でも園を休ませないよう、気をつけてほしいと思う。

やがてはじめのハイウェイコーナーに戻ってくる。O男「Hちゃん、ぼくの車かしらう。ここへおいで」と声をかける。O男は、三台車をもっており、その中の一台を貸してやる。H男「あ

りがとう」と返事をし、道路を車で走り出す。

しばらくあそんでいたが「ぼくも作るわ、これ返す」とO男に車を渡す。「ええわ、ぼくまだあるもん」とO男にいわれ、それをもらい、製作コーナーへ行く。教師「Hちゃん、すきな箱さがしてあげようか」と声をかけると「いいわ、自分でさがすで」といって、H男は大きな段ボールの箱の中へ頭をつっこんで、気に入ったのを探している。これでいつものH男に戻ったような気がする。ほかの幼児よりまわり道をしたけれど仕方ないことだと思ふ

## △九・一〇▽

クラス全体が落着いて活動をはじめたようである。

### ハイウェイごっこ

#### ◎製作コーナー

乗物を作るのに十分だと思われる素材を教師が準備しておく。(板ぎれ、木車、ヤクルトのあきびん、王冠、牛乳のふた、あき箱いろいろ、ひごなど)

昨日のつづきで、M男ら六名は製作に熱中している。M男は、車がまっすぐにつかないので困っている。何回机の上で動かしても曲っていく。隣のS男に「Sちゃんのちょっとかして」という。S男は、気持よく自分の作りかけの車を渡している。M男

は、自分の車と比較している。M男「なんでぼくのはまっすぐ走らんのかな」S男「かしてみい」とM男の車を調べにかかる。「ここんとこ、しっかり釘うつんやに。タイヤぐらぐらや」といながら、M男の車をなおしている。M男「ありがとう」と返事をして、いっしょけんめい見つめている。S男のように困っている友だちを見つけて助けてあげる態度が身についてきたことをうれしく思った。

一方、F男は段ボール箱の中に頭をつっこんで何やらさがしている。「Fちゃん、何さがしているの」とたずねると「ぼくトレーラー作りたいのやけど、開いたり閉じたりする箱ないの」という。「そしたら自分で作ったらどう」というと、「ぼくのではうまく操作できやんの」と答える。「それでは先生がいいのさがしてきてあげるわ」といって、物置へ箱をさがしにいくと、ちょうどハイクラウンのあき箱がみつかったので、F男に渡すと、満足そうに開いたり閉じたりしていた。やがて、のりではかわくまで使えないし、とれやすく、セロテープと比較すると粘着力では劣ることも、今までの経験でよく理解しているのであろうか、車体にビニールテープでしっかりまきつけ満足そうに動かしている。

G男は、ヤクルトのあきびんを利用してミキサー車。A男は、板の先をのこぎりなどでがらせて競争用自動車と、みんないっしょけんめいに取り組んでいる。女兒も関心を示し、二人、三人と

寄ってきて製作をはじめ。

このように、ある程度十分教師が考えて素材を用意しておけば、幼児の創意工夫がよくなされ、満足して作業をすることができ。

製作活動において、入園もないころは、木片や石を自動車や人間に見たてて、ごっこなどの活動をとおして自分さえ満足であれば十分活動できたのであるが、やがて、それでは満足できなくなり、使うものを画用紙などに描いたり、切りぬいたり、箱にはりつけたりして、共通の遊び道具として、相手にも理解してもらおうと努力をするようになる。つづいて、より現実に近いものを作ることで満足を覚えはじめる。そのために箱を組みたてたり、平面のものを立体化したり、そのほかの素材と組んで目的を達成しようとするのである。

教師は、ひとりひとりの幼児のこのような発達を理解して、援助してやる必要があろう。

#### ◎段ボールコーナー

教師が、駅などを作ろうと、きのうから準備しておいたのを見つけたK子ら三名は「先生これで何するの」とたずねる。「そうね。これで駅やデパートを作って、ハイウェイであそぼうかな」とひとりごとのようにいうと「そしたら私らに作らせて、近鉄四日市駅作るわ」とK子は、道具箱を取りに行く。どこまでK子ら

と教師の考えが合ったのか少し心配であったが、K子らのようすを見守ることにする。

K子を中心に、H子、T子はすべき仕事をすすめている。K子「この箱、こう立てて立つようにしやへん」とほかのふたりにいうと「うん」と答える。H子「入口作って窓もあけよう」という。K子「そんならだれがおさえて、たおれるわ」という。

今までこのようすを見ていたI男は「ぼくが持つてやろう」といって仲間入りをし、持ち役をかってでる。K子「わたし窓作るわ、ハサミで穴あけるわな」といって段ボールの箱へハサミをつきさしたが、段ボールが厚いので思うようにハサミが動かない。おさえ役をしていたI男がそれを見て「ぼくがしてやろう。男やで力持ちやでなあ」という。K子は、すなおにI男と交替する。

しかし、I男の力でも切れないので、教師は教師用の大きいハサミをI男に渡し「力を入れてがんばって切るのよ」と励ましてやる。I男は、喜んで受け取ったが、少し無理のようである。「それでは、先生が切ってみるわね。どこまで切ったらいいの」とたずねると、K子「こうして、こうして」と指先で線をかいていく。H子「つめでかきな、ようわかるに」という。「Kちゃんつめが痛くなるわよ。そのかわりクレパスで描いて」と教師がいうと、パスでその位置を知らせてくれたので切りにくいところだけ切って、あとは自分たちでするように話をする。

「先生は、早くてじょうずやなあ」と、いっしょに作っている気持になったのか、幼児は大喜びである。細長いあき箱を斜めに重ね、屋根を作り、K子とT子は赤いビニールテープで一面にはる。「わたしは、マジックでぬるわな」とH子は、だいたい色をとりだし建物をぬりだす。I男はおさえ役をしながら「もっと入口を大きくあけよ」とか「その色かえた方がきれいやに」とか、自分の意見をいう。いわれた幼児も「そうやな、そしたらかえようか」と話をしながら楽しく仕事をつづけている。

やっとでき上がったので「先生おいてくるわね」と見せにくる。「すばらしいわね」とほめてあげると得意になり、ハイウェイで遊んでいる幼児に「これ四日市駅です。どこにおきましょう」という。T男「ありがとう」といい「おい、みんなどこに駅作る」とたずねる。「あそこがいい」と道路のこんでいないところを指さす。「ここにおいて」とT男はいう。K子は、いわれたとおりにおく。

K子たちの作った入口の高さと道路の積木の高さが違うので入口が小さくなった。H子「もつとここ大きく開けよう」という。K子「もう一度やりなおしてこよう」と再び作りなおしにいった。今度はうまくバランスがとれた。このように自分たちの納得のいくまでやりなおす態度をうれしく感じた。ビニールテープ一本使って少々もったいないと思っていた教師の気持も、幼児の

納得いく行動ですっきりとした。

E男ら三名が「先生、ぼくら駐車場作るわ」といって、段ボールの製作にかかる。E男「ぼくらは、時計のついた煙突のあるビルディングにしような」と楽しそうに相談をしている。きっとこの幼児たちもすばらしい活動をつづけてくれるだろう、と教師自身も楽しくなってきた。

#### ◎中積木コーナー

ハイウェイを積木で作り、それぞれ自分の作った車を動かして活動している。はじめは四、五名だったのが、だんだん参加人員も増してきたので、道路がせまくなってきた。

O男「せまくなったな、道路作りなおそうに」と周囲の幼児に話しかける。「よし」とB男は返事をして、トンネルの中積木をはずして道路にたした。O男「トンネルなしは、つまらんなあ」「ええやんか、広うなるやもん」というものもある。うまく意見が合わないようなので「そしたら、これでトンネル作つたら」と教師が大きい円筒でトンネルを作りはじめると「それがいい」とみんなは受け入れてくれる。それに刺激されてか、T男らが「この車庫も段ボール箱にかえよう」といって、中型積木で三階建てになった車庫をとりのぞき、かわりに段ボール箱を二つ重ねて車庫とする。そして、C男の発案で上りと下りの道路をそれぞれ板で仕切って作った。

製作コーナーからもってくる駅やビルのところで止まったり、休憩したりするので、信号を作つたらもっと楽しくなるのではないかと思つて、そばにいたC男に「ねえ、信号作つてみない」と誘いかける。C男「うん」といい、あき箱を利用して作つてくる。はじめは、目新しいので、信号をみて止まったり動いたりしていたが、次第に信号は無視されはじめた。

「これは、ない方がいいなあ」とB男がいう。O男「そうやな人の通るところにもつて行こうよ」と移動させてしまった。これを見て、教師自身のセンスのないことに気づき苦笑してしまった。あそびをより深めてあげようと思う気持から、幼児の気持にそぐわず一人ずもうしたことがおかしくなった。やはり、ハイウェイには信号はいらないのである。

#### ◎絵画コーナー

S子、N子、T子三名は、自由画帳に絵を描いている。人形や花でいっぱいである。よく見ていると、何とはなしに描いているように思えてきたので、ハイウェイごっこに誘ってあげて、より楽しい活動をさせてあげようと思い、画用紙をもって三名のところへ行つた。

「Sちゃんたちじょうずにかけたわね。今度はこの画用紙にお花や人をかいてごらんさいよ。ハサミで切り抜いてハイウェイのところへ飾つたら」と誘いかける。三名は、どうしようかと顔を

見あわせて目くばせしている。元気のいいT子が「しよう」という。あとの二名も「わたしもする」といい、人や花を描きだす。

T子「切ったら、先生、のりでつけるの」と聞きにくる。「そうね。積木やいろいろのところにはるから、セロテープにしましよう」というと「はい」といって、カッターを取りに行く。そして、自動車を動かしている幼児らに「これはってよろしいか」とたずねる。B男「花は駅前にしてな」C男「駅の中にも人はってな」と注文をつける。三名は急に活気をおび、いそがしいといながらも楽しそうに、描いたりはったりしている。

そして「私もあとで、車作ろうか」と話し合っている。教師の積極的な働きかけで、グループから離れていた三名を仲間入りさせてよかったと思う。教師は、時に応じて積極的に指導することも大切であると感じる。ハイウェイごっこは、それぞれのコーナーを十分利用し、交流して、楽しく活動をすすめている。

### ペープサート

ペープをさせようと思い、昨日からコーナーを設けておいたのだが、登園してきたN男とM男は、これを見つけて手に取って見つめている。

N男「運動会の時とよくにているなあ。おどろうか」とM男にいう。「うん」とM男は返事をし、ふたりで「バトンマーチ」を

口ずさみながらおどります。これに気づいたU子ら三名は「わたしも入れて」といって仲間入りをする。

M男「もう一度はじめからしよう」といってまたはじめからおどります。U子「また運動会あるのやろうか」M男「知らん、ぼくら勝手におどっただけやもん」という。A子「先生に聞いてみよう」といって「先生、運動会あるの」とたずねる。教師「どうして」A子「それでもNちゃんらおどっともん」という。

教師「その竹は、ペープサート作ろうと思つて用意したのよ」と説明すると、A子「知ってるわ、前にしたことあるもん」と返事をして、友だちのところへもどつていって「運動会とちがうの、ペープサート作るの」と報告する。U子「もうすぐクリスマスやでな」という。U子はきつともうすぐ発表会でもあると家庭で話し合ったのだろう。

でもほかの幼児は全く関心を示さずにいる。教師も全くその気持もなかったのではとすると。けれどU子の意見を聞いたようにして「それでは先生サンタさん作ろうかな」とひとりごとをいっていると、G男「先生、ぼくじょうずやで、かかせて」という。「それではGくんにまかすわね」といって、四つ切り半分の画用紙を手渡す。ほかの幼児も「わたしはウサギ」「ぼくはクマ」などいって、それぞれ画用紙を受け取り描きはじめる。

「この紙、ちよつと大きいでしょう。だからなるべく紙いっぱい



に描くように気をつけてね」と助言を与える。

幼児たちが楽しそうにペープサートを作っているうちに、教師は、既製の人形劇用の舞台を用意してやる。

G男のサンタが一番早くでき上がり舞台へやってくる。ペープサートを動かしながら、

G男「だれかいないかなあ。みんな早くおいでよう」ともうサンタになりきっている。絵を描いている幼児らも「もうちょっとだよ。まってね、おじいさん」と、もうその役割になり切って返事をしている。幼児たちは、自分たちの役割を認識して、その中で自分の夢や感情を表現しているようである。やがて、U子ら四名は自分の作ったものをもって舞台へやってくる。そしてペープサートを動かしながら、

「おじいさん、おまたせしましたね」

「こんにちは、あんだだあれ」

「わたしはうさぎです」

「みんなで仲よく遊びましょう」

としばらく舞台でこのような会話をつづけて遊んでいたが、このように興味を示した幼児らがぼつぼつ椅子を持ち出し、観客になりはじめる。観客のY男が「サンタは夜しかこんのにおかしいわ。ひる、動物とあそんでいるわ」と大きな声で笑う。K子はいきなり舞台から顔をだし「なんでサンタが動物と遊んだらいかん

の」と自分の考えが相手に受け入れられなかったので、赤い顔をして、おこる。Y男はびっくりして黙ってしまふ。

このままでは、幼児たちの夢も育たず、活動も高まらないだろうと思われたので、こゝらで話の発展を考えさせようと思い、この機会を利用した。

「じゃあ、みんなはどうしたらいいと思うの。一度考えてみない」と教師が発言をする。U子「動物たちだけで遊んでいて、夜になって帰って家でねると、サンタのおじいさんがプレゼントもってくるの」

教師「U子ちゃんじゃなくにお話作れたわね。みんなはどうするの」と問いかけると、A男「プレゼントもらって、ありがどう」といって、おじいさんといっしょにあそびたい」という。

教師「みんなお話よくわかったかしら、一度ここまで先生といっしょにやってみましょう」と相談をもちかけると、U子「先生は何になるの」とたずねる。教師「そうね」と考えたふりをして幼児の反応を待った。

みんなは、口をそろえて「サンタクロス」という。そこで、サンタの役をひき受け、ペープサートを使い、幼児と教師のことばのやりとりから、友だちへの誘いかけへと内容を深めていくことにした。

教師「今夜はクリスマス、よい子のおうちはどこかしら」とあ

たりをみまわす。

C子「先生、わたし家作ってくるでまってる」と急いで机のところに走って行って、煙突のある家を描きだす。その間にS男は、あき箱で作った家を棚からもってきて「これ使おうに」という。S男の思いつきの早いのに教師自身も感心してしまった。このような調子でサンタのプレゼントを紙に描いたのと、実際のままごとコーナーからもってきたのとを合わせて使い、楽しく活動をにつづけた。

大体の話のすじができあがったようなので、

教師「だれか、サンタの役をかわってくれない」とたのむと、D男が「ぼくがする」といってきたので、教師と交代する。D男はサンタが歩くとき、リンリンリンと口ずさみながら舞台をはなれ、保育室をひとまわりして、また舞台に戻ってくる。本物の鈴を渡すと、ふんい気が高まると思ひ、鈴を用意して渡してあげると「この方がほんものみたい」と大喜びをし、活動をつづける。

このようになったことについては、ベープサートの限界ということも考えられるが、幼児たちは、もっと適切な自己表現をするために、このように、舞台にとらわれず自由に場面を拡大しているようにも思われる。いずれにしても、実際には、役割を自分の満足のいく形で果しておりながら、一方では、現実を離れ、自分たちの夢の世界をみたそうとするようにも見うけられる。

しかし、これらの表面的には相反する幼児の行動にとらわれず、この活動の内面的なものがりをうまく生かして指導するとは大切であろう。いずれにしても、一見矛盾とも思われるような対立と分化の中で発達していくのであろうから、現在五歳の幼児ではこれでもいいのではないかと思う。

クリスマスは、幼児の中で共通した話題や夢があり、劇的活動の素材としては、よかったようである。なお、今後の指導において、全体の役割を見とおした中で、自分の役割についての認識を深め、その中で自己表現ができるように指導していきたい。

ほかに戸外で、ゴムとび、円形ドッジボールをしていたグループもあったが、ここでは紙面の都合上省略する。

#### 八一〇・二〇V

きょうは、隣のクラスと合同でクリスマス会の練習をすることになっていたため、それぞれの活動をつづけさせてあげたい気持ちもあったが、幼児たちには「つづきは、またすることにしましょう」と一応区切りをつけて、全員で遊戯室に入る。

全員の幼児に、お母さんといっしょにクリスマス会を楽しむ話をする時、大変喜び「お母さんいつくるの」と大にぎわいであった。そしていっしょにフォークダンスをおどるので、その練習をする時話をしたら、大張切りで、何回でもおどりたいという。目的ははっきりし、楽しい夢のあるクリスマス会を、いっしょうけん

めいに楽しもうとしている幼児の姿にふれ、ほほえましくなる。

△一・三〇▽

弁当の準備、昼食をたべる。

△一・三〇▽

きょうは、午前中室内あそびがつづいたので、午後からはほとんどの幼児は戸外にでて、おにごっこ、なわとび、円形ドッジボールなどと、素朴なあそびをおして、全身を使って、のびのびと活動して、満足そうである。

△一・三〇▽

降園

### 三 おわりに

まず第一に、きょう一日中幼児といっしょに楽しく行動できたことをうれしく思った。幼児たちの態度もしっかり落ちてきて、*「何をする」*という目的と行動が、つながりをもちはじめ、友だちといっしょに楽しもうという気持がよく感じられた。

ハイウェイごっことベープサートとふたつの活動が同時になされたことは、幼児の活発な活動となり、友だちとの交流もスムーズにいったと思われる。

幼児たちのひとりひとりの創造力は、友だちの中で十分生かされるようになりはじめ、教師自身も友だちの一員のように感じら

れた。教師自身活動をより発展させるために、十分な環境を設定し、整理しなければならないと思った。

このようにグループ活動が活発になるにつれて、集団生活からとりのこされる幼児がないようにひとりひとりの幼児の発達のがいを、教師自身はよく理解し、幼児の要求をどのようにグループ内で認めていくか、ひとりひとりをよく見つけて指導していかねばならないと思った。

幼児たちのまじわりはいろいろあろうが、結局は満足感にあふれた経験や活動をおして、お互いの人間関係を深めていくようにせねばならないと思った。

(四日市市立下野幼稚園)

